



新井淳一氏の布（伝統と創生）

桐生が生んだ世界的なテキスタイル・プランナー新井淳一さん(80)が創る布の大規模な展示会が東京西新宿の東京オペラシティアートギャラリーで開催されている。新井さんの60年にわたる先鋭的な布づくりを紹介する画期的なものだ。

縮絨（しゅくじゅう）、コンピューターによる多重織ジャカード、メルトオフ（溶解）など革新的な技法と思想を込めて創られた約60点の布が鑑賞する人を圧倒している。

多様で自在、創造的な新井さんの布を言葉で表現するのは難しい。展示会のリーフレットでは、「プラスチックフィルムを素材とする金銀糸で織り上げた超軽量の布。それを伝統的な絞り染めの技法を使って薬品で部分的に溶かし、透明と反射を共存させた布。また、ウールを使用した布を長時間水洗いすることで生まれる量感あるフェルト」とある。

新井さんは18歳で家業の織物の世界に入り、20歳代初めには金銀糸織物で多くの新技法を開発、コンピュータワークによる特殊ジャカード織物は布の新しい領域を拓き、三宅一生氏や川久保玲氏らファッションデザイナーとの協働のなかで素材を提供、1980年代初頭のパリ・コレクションで世界に衝撃を与えた。

1983年の第1回毎日ファッション大賞で特別賞を受賞。海外、国内各地で「布展」を開くほか、国内繊維産地の技術アドバイザーや美術・工芸大学等の講師を務め、多くの若手後継者を育て、世界のテキスタイルデザインをリードしている。1987年英国王室芸術協会より英国名誉産業デザイナーを授与。2003年、英国芸術大学連合から名誉博士号、2012年、英国王立芸術大学院名誉博士号授与。

制作の拠点は桐生市、ノコギリ屋根の工房、旺盛な創作意欲でファッション界に大きな影響力を与え続けている。世界が注目する新井さんの布は、「創生の原点は伝統の鉱脈の中にあります。伝統無くしての創生は在り得ません」と自ら言うように、桐生産地の伝統なくしては語れないものであり、桐生の“至宝”である。

東京オペラシティアートギャラリーでの「新井淳一の布 伝統と創生」は3月24日まで開催、7月6日から9月1日までは足利市立美術館に巡回する。

新井さんの事績については、デザインジャーナリスト・武蔵野美術大学教授森山明子氏著「新井淳一―布・万華鏡」（美学出版）が2012年3月に出版されている。

手仕事とテクノロジーを融合
布に込める、ものづくりの思想